2025 春学期　安藤百福名誉博士栄誉賞／奨励賞受賞者

FELICIA ANGELICA HARTONO
（インドネシア出身）

国際経営学部 ８セメスター

安藤百福名誉博士
栄誉賞

安藤百福栄誉賞の受賞、おめでとうございます！

ありがとうございます。選考は本当に面白かったです。公開面接では、「あこがれの人はいますか？」「目指す先輩は？」みたいな、思いがけない質問もありました。審査員の質問はとてもクリティカルで、考えるきっかけをたくさんもらいました。面接の準備は特にしていなかったけれど、自己理解や self reflection を普段からしていたので、自分のことについてしっかり話せたと思います。3 回生のときは忙しすぎて、自分の気持ちを整理できなかったんですが、1 ～ 2 週間しっかり時間を取って考える時間を持ったことで、自分の行動の意味を見つめ直せたのが大きかったです。

面接でも質疑応答がとても上手でしたが、逆に苦手なことは？

実は「頼まれると断れない」んです。頼ってもらえると嬉しくて、つい引き受けてしまいます。でもそうすると、つい抱え込みすぎてしまって…。でも、いろんなことに挑戦できたのは、その流れに乗ったおかげでもあります。実はリーダータイプではなくて、自分から「やる！」って言うタイプではないんです。でも誰もやらなければ自分がやる、というスタンス。初めて作った団体 ORCA もそうでした。高校では部活もなかったし、やりたいことを形にする環境がなかったけど、APU に入ってからは、先輩に背中を押されて挑戦できるようになりました。最初はネットワーキングも苦手でした。でも ORCA を始めたことで、たくさんの人と話す機会が増えて、コンフォートゾーンを抜ける経験ができました。一歩踏み出せば、もう戻れないんですよね。その最初の一歩が一番大事だと思います。

奨学金に応募したきっかけは？

大学院に進学したいという気持ちが強くて、勉強が好きなんです。インドネシアでは、大学を卒業しただけではあまり価値がないという現実もあって、もっと学びたいと思うようになりました。将来はリスクマネジメントの分野で、今までお金を貸せないと判断されていた人たちにも価値を見出して、貸せるような仕組みをつくりたいと思っています。そのためにはやっぱり学費などの資金が必要で、奨学金に応募することを決めました。

APU に入った時、やりたかったことは？

実は、日本に行きたいという気持ちは中学生の頃からありました。独学で日本語を勉強していました。でも「日本で何をしたいか」という明確なビジョンはなかったんです。とにかく勉強をがんばろうと思っていて、課外活動とかは全然考えていませんでした。でも APU に入ってから、「新しいことにチャレンジするのって楽しい！」って思うようになりました。最初は料理もできなくて、ローソンのカレーばっかり食べてました（笑）。初バイトも体力がなくて大変だったけど、自分には向いていないことがわかって良い経験でした。それで、方向転換して、通訳のバイトをするようになりました。それでまた様々な人に出会って、それぞれの人生を深く知って、学生中に沢山の出会いがあったことが自分にとっての財産になっています。

書類や面接の準備で苦労したことは？得られたことは？

発表の内容で「何を伝えたいか」「何が自分にとって一番大事だったか」を考えるのが難しかったです。タイムライン通りに並べるのではなく、ストーリーとして伝わるように、自分なりに構成を工夫しました。

この奨学金が、これからの学生生活にどう役立ちそうですか？

大きいのは「責任」を感じるようになったことです。受賞をしたからには、もう戻れないし、進むしかないなと思っています。この受賞は、私一人の成果ではなくて、周りの人たちのサポートがあったからこそだと思います。だから、この賞はみんなで成し遂げたもの。感謝の気持ちでいっぱいです。

これから応募を考えている後輩にメッセージはありますか？

まずは「自分をよく知ること」が大切。何をしていて、なぜそれをやっているのか、過去の経験がどう今につながっているのか。自分の強みや弱み、価値観をちゃんとレビューすることがとても大事です。

小溝柊汰
（日本出身）

サステイナビリティ観光学部
5セメスター

安藤百福名誉博士
奨励賞

小溝さんの受賞の理由となった、彩鳥（いろどり）の活動について教えてください。

彩鳥は、僕が立ち上げた地域のフードパントリー活動で、今は亀川地域の 14 の町内会を巡回しています。地域の方が軽トラを出してくれたり、公民館を無償で貸してくれたりと、本当にたくさんの支援を受けています。最初に出会った地域の会長さんが地域の会議にも繋いでくれて、スムーズに活動を広げることができました。

コミュニケーション力が高く、積極性に溢れているのは入学した時からですか？

いえ、全然（笑）自分が変わったのは彩鳥を立ち上げたあたりからですね。APU に入ってしばらくは、くすぶって、大学にも上手くなじめていない感覚がありました。でも、仲間や地域の存在が、確実に自分を変えてくれました。チームの仲間たちはそれぞれに情熱を持っていて、お互いのスキルややりたいことを尊重しながら活動しています。壁にぶつかった時にはみんなで集まって相談して、経験を共有し合うような関係性です。今では、彩鳥が自分たちにとっての「居場所」になっています。

安藤百福奨学金に応募しようと思ったきっかけは？

実は、周りからの後押しが大きかったんです。半年前くらいから友人やオフィスの方に「応募してみたら？」と言われるようになって。それに、入学式でスピーチをした John さんの存在も刺激になりました。彼も僕の前に同じ賞を受賞しているんですが、「君も絶対に挑戦した方がいい」と強く薦めてくれました。同学年で頑張っている友人たちも応募するっていう噂を聞いて、それを聞いて「負けられないな」と思って、良い意味で闘争心を燃やしたり（笑）。

書類申請や面接準備で大変だったこと、学びはありましたか？

一番大変だったのは、自分のことを全く知らない人に限られた字数で自分の活動や想いをどう伝えるかっていうところですね。具体的な数字や実績、社会的評価をできるだけ盛り込むようにしました。活動の伝え方を磨くことは、講演や補助金申請をしてきた経験がすごく役立ちました。先輩にもアドバイスをもらって、だんだん言語化の精度も上がった気がします。

公開面接はいかがでしたか？

すごく良い機会でした。自分の活動を改めて見つめ直すきっかけになりましたし、「APU＝国際的・ビジネス系」というイメージに対して、国内で地道にボランティア活動をしていてもちゃんと評価されるんだということを示せたのは大きかったです。こういう分野でも実績を残せるって、後輩たちに伝えられたと思います。

奨学金は今後の学生生活にどう役立ちそうですか？

すごく役立つと思います。フードバンクについて、学術的にもちゃんと深めていきたいと思っていて。今はまだ研究事例も少ないので、現場を見に行く旅費などに使いたいです。できれば 47 都道府県すべてのフードバンクを自分の目で見て回りたい。そこで得た知見を、またフードバンクでお世話になっている亀川に還元したいと考えています。

HSU LATT NANDAR
（ミャンマー出身）

国際経営学部 5セメスター

安藤百福名誉博士
奨励賞

とても謙虚な印象がありますが、この奨学金への応募は思い切ったんですね。

はい。APU に入ってから、学業だけでなく他にも何かポジティブな影響を周りに与えたいという思いがありました。両親とも「自分がどこまで成長できたかを証明しよう」と約束していました。私はミャンマー出身ですが、経済的な支援を家族に頼れないので、働けるぎりぎりの制限時間分アルバイトをしています。そのような状況で、学業と課外活動に懸命に取り組んできた自分にとって、この奨学金は一つのマイルストーンでした。結果発表の日には、父は仕事を休んで私の報告を待っていてくれたので、受賞を知らせた時にはいつもは感情をあまりあらわさない父がすごく喜んでくれていました。

申請の準備の中で大変だったことはありますか？

とにかく精神的にすごくエネルギーを使いました。この奨学金選考は候補者も、インタビューの様子も公開されるので、内容は正確であること、そして誠実であることを強く意識しました。特に「人前で自分の弱さを見せる」ことになるかもしれないということに挑戦するには勇気が必要でした。でも、申請準備を通して、困難を抱えるミャンマーというバックグラウンド、そこでも「諦めなかった自分の継続性」に改めて気づくことができました。そして未来についても、ビジョンがより明確になりました。

コンフォートゾーンを抜けて、挑戦したことで得たものがあったんですね。公開面接はいかがでしたか？

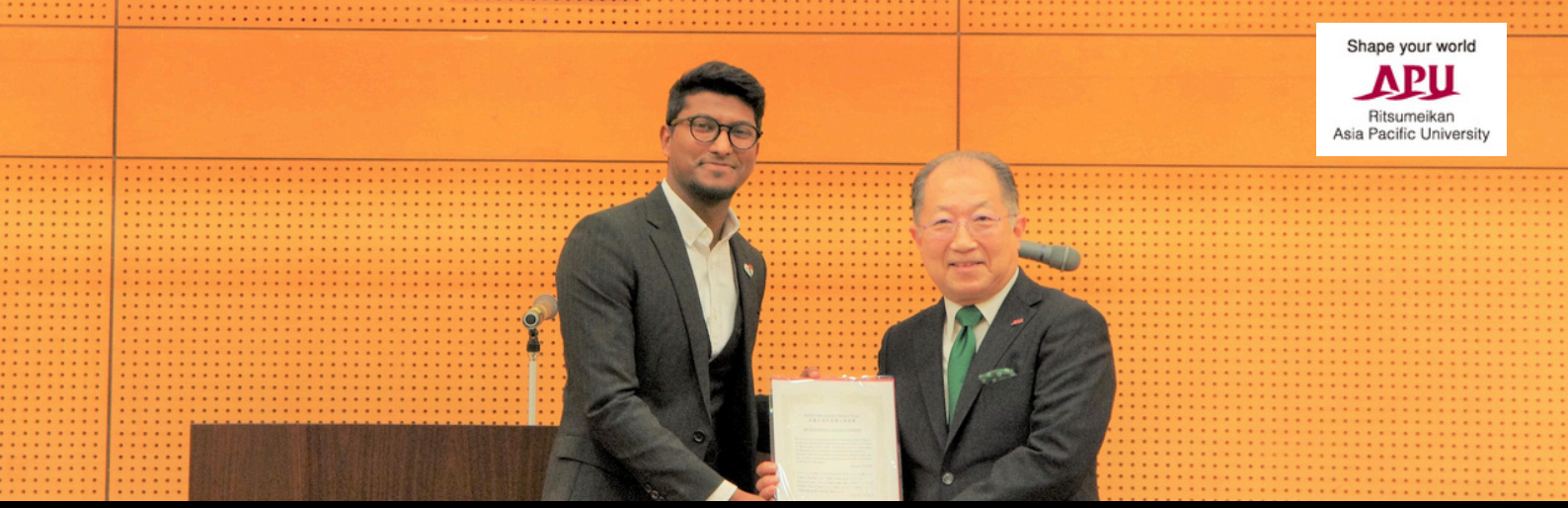
面接は、まさに自分を「表現する場」だったと思います。過去の受賞者と自分を比べてしまい、自分には無理なのではないかと悲観的になることもあったのですが、安藤百福賞の面接は「自分について語ること」そのものだと思い直しました。先生や先輩にも相談をし、出来る限り「本物の自分」を出せるように準備しました。

今回の奨学金選考は、残りの学生生活にどう役立つと思いますか？

自分自身やアイデンティティに向き合えたことが、一番の学びです。これからも謙虚に、真面目に学び続けて、社会にポジティブな変化をもたらしたいです。そして、APU に少しでも恩返しができたらと思います。

これから応募する後輩へのメッセージをお願いします。

正直、他の受賞者がすごくユニークで、最初は自分と比べてしまいました。でも大事なのは「自分自身にフォーカスすること」だと気づきました。審査員が何を見ているかは人それぞれですし、誰もが違っていていいんです。私は入学当初、劣等感を持っていましたが、「やりたいこと」を一つひとつ行動に移していくことで、少しずつ前向きになれました。月に一度ジャーナルを書いて、アカデミック、経済的な事、健康状態など、各項目の目標を整理していくという方法を取っています。この奨学金の準備中は毎日 5 回くらい自分の気持ちを言語化して、自分をコントロールするよう努めましたし、それがとても上手くいきました。



2024秋学期　安藤百福名誉博士栄誉賞/奨励賞　受賞者

2024秋

MUHAMMAD AJNAS AHMED

安藤百福名誉博士
栄誉賞

国際経営学部　8セメスター
インド出身

安藤百福奨学金のことはいつから知っていましたか?

1年生の時は完全にオンライン授業だったので、その存在に気が付いたのは2年生になってからです。最初は、キャンパス内に飾ってある過去の受賞者写真を見て、安藤百福名誉博士賞という名前を知っている程度でした。実は5セメスター生の時に奨励賞にも申請したのですが、その時は最後の選考まで残ることは出来ませんでした。
8セメスターでもう一度挑戦した動機は三つありました。賞金を自分のGENECTというプロジェクトの活動資金にしたいこと、日清フードホールディングスという大企業が寄付元なので、自分の活動についてNISSINの方のアドバイスを得たいこと、そして卒業式で総代としてスピーチをしてその姿を両親に見せたいということでした。

Ajnasさんが力を入れていたGENECTという活動について教えてください。

2年生の時に高齢者施設でインターンシップをしたことが一つのきっかけでした。その時の施設利用者の方の笑顔と、また「戻って来てね」という言葉が忘れられませんでした。私は国の祖父母のこともとても大事に思っているので、特にそう感じたのかもしれません。そして、施設で活動をした学生の笑顔にも気が付きました。
それで、新しい場所に出ていく事ができない高齢者の方を学生が尋ねることで、素晴らしい効果が出るのではないかと考え付きました。私はいつも社会の人々を助ける力になりたいと思っていたので、これが社会課題を解決する活動になるのではないかと考えました。

社会課題を解決する力になりたい、という思いがあるんですね。

はい。私の育った環境が強く影響していると思います。私は親と兄弟と6人家族なんですが、両親の兄弟やその子どもたちも多く、家族の人数も繋がりもとても強いです。その中で、祖父も父も、ソーシャルワーカーに近い仕事をしていて、いつも他者の為に働いていました。私は小さい頃から父親に連れられて、寄付や貧しい人のサポート活動に参加していました。

そんな家族の繋がりが強い場所から、別府での学生生活は一大変化ですね。

そうですね。でも私は好奇心旺盛な正確で、新しい環境を楽しみたい気持ちで一杯でした。そして、入学した時から自分の目標は明確でした。それは自分の弱みである人前でのスピーチの苦手さの克服です。APUで、たくさんの失敗をしたし、恥ずかしい思いもしたけれど、苦手なままでは成長できないと思い、挑戦し続けました。そのかいあって、TED TALKでスピーチする機会を得、やりぬいた時には感無量でした。

苦手を克服したんですね。自信がなかったり、苦手な事をがある学生も多いと思いますが、何かアドバイスはありますか?

私自身については、一生懸命やる部分と、自分ではどうしようもない出来事には意味があると思って楽観的でいる部分があるなと思います。それから、皆さんに伝えたいことは、
他者と競争するのではなく、自分自身と向き合って、より良い自分になろうとすることが
大切ということです。
安藤百福名誉博士賞は、より良い自分になろうと努力する私にとってとても貴重な賞でした。
この賞を目指したことで、さらに努力するモチベーションを得ることが出来ました。
これからも、自分が得た機会や環境を当たり前と思わずに、社会へ還元していきたいと思います。

Shape your world
APU
Ritsumeikan
Asia Pacific University

JHA ASHMI

安藤百福名誉博士
奨励賞
国際経営学部　5セメスター　インド出身

AshmiさんはAPUに転学してきたんですよね。APUを選んだ理由を教えてもらえますか?

APUは留学生にも様々な機会があることが魅力でした。私は自らが積極的に関われる活動をしたり、提案を実現できる環境にいたかったんです。これまでに8つのケースコンペティションに参加し、在校生 特命副学長にも任命されました。 APUは別府という、決して大きくない街に国際的な環境がある、本当に魅力的な学校です。ここでビジネスマネジメントを高いレベルで学ぶことが出来ていると感じています。

Ashmiさんは本当に様々な活動で活躍していますが、タイムマネジメントはどう工夫していますか?

私はやることがあるとがあることが好きなんです。それで予定が沢山あるので、カレンダーアプリにはとても頼っている。気になったことはまずトライしてみて、「違うな」と思ったらそこでストップすれば良いと思っています。APUでは様々な活動に、よりプロフェッショナルに取り組めるスキルが身に付きました。そして、自分のためではなく、自分たちのためにインクルーシブな活動をするというマインドセットが身に付きました。これからも地球市民として、物事を捉えていきたいと思っています。

この賞に挑戦しようと思ったきっかけは何ですか

この賞のことは入学申請時から知っていました。応募した目的は受賞することでなく、努力すること。結果がどうであれ、限られた時間でどのくらい準備ができ、ベストを尽くせるかどうか挑戦しました。この賞では自分のことを発表し、自分自身について分析するので、自分の人生のケースコンペティションのようだと思いました。申請を通して自分のことを沢山学び、自身を見つめ直す良い機会でした。

今後の目標はありますか?

ビジネスケースコンペティションへの参加は続けたいです。そして後輩を育てたいと思っています。それから、日本での留学について、つまりAPUでの留学生の経験について本を書きたいと思っています。APUの国際的で魅力的な環境について、英語で本を書き、世界中の人にAPUを宣伝したいです。

後輩へのアドバイスはありますか?

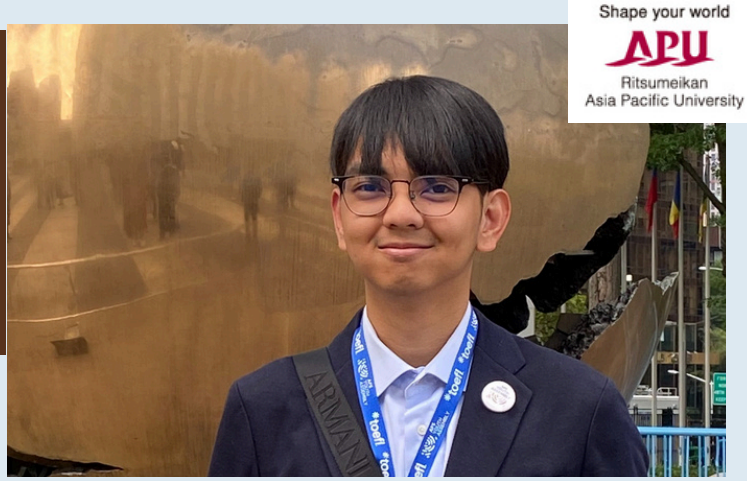
何かを勝ち取る事だけでなく、ベストを尽くすことにフォーカスしてみるといいと思います。私は毎日、一日が終わる時に今日した事と、明日したい事を見つめ直しています。自分のコンフォートゾーンから一歩抜け出して、大きな未来を描くようにしています。そして、今だけではなくその先に何を成し遂げたいのか考えています。座右の銘の「千里の道も一歩から」という言葉を大切にしています。

2024秋

IDOS JOHN REY SADANG

安藤百福名誉博士　奨励賞

アジア太平洋学部　5セメスター
フィリピン出身



この賞に挑戦しようと思ったきっかけは何ですか

入学した時からすごく名誉のある賞だと知っていました。だからこそ難しいとも思っていました。でもそもそも挑戦しないとチャンスはゼロだから後悔しないようにやってみようと思いました。自分には「人を助けたい」という意欲が常にあって、APUでも様々なボランティアやRA、TA活動に関わってきたので、それを伝えたいと思いました。

ボランティア、人助けをしたいという気持ちがあるんですね。

はい。RAもTAも、周りの役に立ちたいという思いがあるからです。安藤百福名誉博士もカップラーメンを発明して、多くの人を助けてきたので、共感出来る所が沢山あります。そういうことを伝えたいということも申請した動機の1つでした。

申請で大変だったことはありましたか?

特に、公開プレゼンテーションの準備をしている時は、他の候補者と自分を比べてプレッシャーを強く感じていました。でも徐々に、自分を信じて、自分のスペシャルな部分を探そうと思うようになりました。自分に足りていないことではなくて、自分の強みにフォーカスするようになっていきました。みんながやるから自分もやる、ではなくて、自分らしく。Be Uniqueを心掛けました。それで、プレゼンテーションでは自分らしさが出るパーソナルエピソードも沢山盛り込みました。

「自分らしく」。難しいけど大切なことですね。インタビューでは自分らしさを伝えられましたか?

そうですね。インタビューが18分間と聞いて、「長いな」と思っていたのですが、実際にやってみると、「もっと質問して欲しい！」と感じました。予想していなかった質問もありましたが、「人を助けたい」という信念を分かっていたから、その場で質問に答える事もできました。

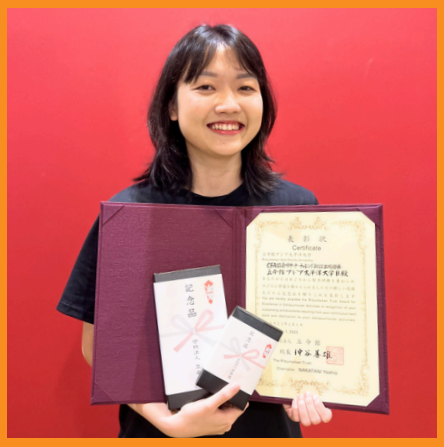
後輩へアドバイスはありますか?

「まずはやってみること」ですね。
やらなかったらチャンスはない。皆、それぞれのユニークなエピソードを持っているはずなので、自分の良さ、自分らしさを信じてトライして欲しい。
それから、「自分にとっての優先順位を知る事」です。私にとっては学業が優先事項でした。それが、活動かもしれないし、アルバイトかもしれない。優先事項が分かれば、それに全力を注いで、それが達成できたら次に何かしようという意欲が沸きます。

私の安藤百福名誉博士賞
受賞ストーリー

2024 春

受賞者



NGUYEN KIEU CHI

APM 8セメスター

2024年春 栄誉賞

立命館アジア太平洋大学
国際経営学部
8セメスター

入学当初から4回生に至るまで、継続的に日本及び世界を舞台にした様々なケースコンペティションに参加し、APUで学んだ知識を実践でも活かす経験を重ねてきました。また、起業やコミュニティー形成に特化したイベント運営も主導するなどし、リーダーシップを発揮してきました。その一貫性のある行動力とリーダーシップが高く評価されました。卒業後はAPUで自身の経験を活かし、金融や教育の分野で社会に貢献したいという目標に向かって活躍することが期待されます。

安藤百福名誉賞に応募しようと思った理由、きっかけは何ですか？

実は、私はAPUに入学する前から奨学金の情報を探す中で安藤百福名誉賞の事を知っていました。そして、いつも名誉ある賞だと認識をしていました。私が尊敬する先輩たちも安藤百福名誉賞にノミネートされていて、私もいつか受賞したいと思っていました。

私が安藤百福名誉賞について良いなと思う点は、学業と正課外活動の両方に焦点が当てられている点です。学ぶということは、多岐に渡ることであり、私が授業で学んだ事と、活動で経験した事がお互いに影響し、高め合っていると思っています。

私は5セメスターの時に安藤百福名誉賞に挑戦をしましたが、最終選考まで進むことは出来ませんでした。その後でも、ケースコンペティションに参加したり、ベトナムウィークなどのイベントを運営したりと活動を続けてきました。そして、今8セメスター生として、卒業後の将来の準備をしている段階になりました。今回は安藤百福名誉賞の申請準備を通して、APUでの4年間を振り返り、自分という人間を分析することが出来ました。

書類申請、面接準備で大変だったことと、得たことがあれば教えてください。

エッセイの準備をしている時に心掛けていた事は、エッセイで自分のメッセージを伝えることでした。色々と点となって散らばっている自分の経験を繋げて私のストーリーとして伝えようとしました。

ケースコンペティションは私の活動の中でもハイライトでした。私がこれまでに行った活動を改めて紙に書きあげてみると、自分がいかに沢山のケースコンペティションに参加をしているかを知ってとても驚きました。実際に活動をしているときには、どれだけのことをやってきたのか振り返るという事はなく、ただただその活動を楽しんでいましたがその結果を見る事ができました。

公開面接はいかがでしたか？
大変だったこと、得たことがあれば教えてください。

最後の発表者だったので、とても緊張しました。でも、心から話し、正しい回答をするのではなく、情熱を持って答えようと思って臨みました。審査員やオーディエンスの皆さんにも、私が行ってきた活動に対する情熱を同じように感じてもらいたいと思っていたからです。

この公開面接でのプレゼンテーションはケースコンペティションで経験したものとは違いました。ケースコンペティションでは会社のためにリサーチしたことの結果を発表しますが、安藤百福名誉賞のプレゼンテーションでは自分自身について発表するからです。

質疑応答の時間には、思いもよらない質問もありましたが、とまどいはありませんでした。ただ質問に答えるのではなく、自分が様々な事にいつも関心を持つようにしていることを示し、議論をする姿勢で臨みました。

今後本奨学金に応募を考えている後輩たちへメッセージがあれば教えてください。

8セメスター生にとって、安藤百福名誉賞はAPUでの出来事をとても意義のある方法で総まとめするとても良い機会だと思います。私も自分の4年間を振り返り、自分の将来を計画することが出来ました。もし、誰かに伝えたい自分だけのストーリーがあれば、安藤百福名誉賞にぜひ申し込んでください。あなたにとって良い学びのチャンスになりますし、新しい事へ目を向けることも出来ると思います。

2024 春

受賞者

TABASSUM ZAHIN

APM 5セメスター

2024年春 奨励賞

立命館アジア太平洋大学
国際経営学部
5セメスター

これまでにＡＰＵでマーケティングや消費者行動の重要性について学び、近く予定しているオーストラリアでの交換留学では更に知識を深め、広いネットワークを築くという目標を掲げています。将来は博士の学位を取得し、デジタルマーケティングでアジア地域の経済成長に貢献したいという夢に向かって、計画的に取り組んでいる点が高く評価されました。

安藤百福奨学金に応募した理由は何ですか？

1セメスターの時から安藤百福名誉賞のことはAPUで名誉ある賞として認識していました。去年先輩が受賞した時には、この賞はもっと身近なものになり、自分も挑戦してみたいと感じるようになりました。APUで、自分が誇れることを沢山成し遂げてきたと気づいたので、「この賞にチャレンジしてみたらどうだろう」、「受賞しなくても大丈夫。チャレンジする価値がある」と思うようになりました。 私はチャレンジをすることが好きです。いつも好奇心を持っていて、挑戦してみたらどうなるだろうと考えるとわくわくするからです。APUではいつも忙しくしていて、沢山の事を経験してきたという自負があります。

書類申請、面接準備で大変だったことと、得たことがあれば教えてください。

申請の準備自体は、全てとても有意義なものでしたし、このプロセスを通して沢山のことを学びました。故安藤百福名誉博士について調べているうちに、彼が沢山の失敗の末にどのようにチキンラーメンを発明したかということ、そして「挑戦し続ける」という事を如何に体現してきたかを知りました。そしてこれからも学び続けよう、興味のある活動に沢山取り組んでいこうという気持ちになりました。 申請準備のプロセスはとても楽しかったですし、将来についてより明確なイメージを持つようになりました。というのも、以前は将来については何となくしか考えていませんでしたが、申請準備を通して自分自身について、何に情熱を持っているかを振り返り、博士号を取得し、投資家・起業家・政策立案者をつなぐプラットフォームを作り、アジア地域の経済成長に貢献したいという将来の夢を見つけることが出来ました。

公開面接はいかがでしたか？大変だったこと、得たことがあれば教えてください。

ただただ、審査員の前で、自分をプレゼンテーションできることを誇りに感じていました。もし落ち着いて、自信があるように見えたとしたら、セミナーで他の学生と意見を交換するディスカッションの経験を積んでいたからかもしれません。このディスカッションの場では、それぞれの意見に「正しい」も「間違い」も無いのが好きで、ここで様々な視点を学びました。 質疑応答の時間には、想定していなかった質問もありましたが、自分がまだ5セメスター生で、学びと経験の途中にあると分かっていたので、自分を飾ることなく、今知っていることで正直に答えようと思っていました。

今後本奨学金に応募を考えている後輩たちへメッセージがあれば教えてください。

まず、TAを経験することをお勧めしたいです。いくつかのクラスは自分のマーケティングというアカデミックゴールとは直接結びつきませんでしたが、TAを経験して沢山のことを学び、沢山の人に出会いました。 次に、安藤百福名誉賞の準備について相談した時に、教授が私にくれたアドバイスをシェアしたいです。教授は、もしも選ばれなくても、世界の終わりという訳ではない、だからこの機会を最大限に活かし、楽しむべきだと言ってくれました。結果に関わらず、この経験は確実に私が挑戦し続ける力をくれました。

2024 春

受賞者

横山　真之介

APM 5セメスター

2024年春 奨励賞

立命館アジア太平洋大学
国際経営学部
5セメスター

資本主義経済と計画経済に強い興味を持ち積極的に学び、ゼミやＲＡの活動では多文化環境の中で意見を交換し合うことでお互いを高め合う経験を重ね、学業や正課外活動共に成長してきた姿が評価されました。将来は国際機関で格差のない公平な社会の実現に貢献するという目標に向かって、学び、行動し、良きリーダーとして活躍することが期待されます。

安藤百福奨学金に応募した理由は何ですか？

これまで行ってきた、学業だったり活動といった自分の努力を、学業のプロフェッショナルである教授や様々な経験をお持ちの職員の方から直接評価していただき、自分の現在の水準を知る良い機会だと思って応募をしました。私はそもそも、少し難しいかなと思うような事にチャレンジするのが好きで、今回もチャレンジをさせていただきました。

書類申請、面接準備で大変だったことと、得たことがあれば教えてください。

実は、私は日頃から様々な事を自分の中で考えるのが好きなんです。「何故人は生きているんだろう」といったことからグルグルと自分の中で考えを巡らせています。時には周りに疑問を投げかけてみて、他者の新しい考えを取り入れることも好きです。この思考する癖が良い方向に働いたのか、書類では自分の中にあったアイディアを思い切り書くことができました。

公開面接はいかがでしたか？大変だったこと、得たことがあれば教えてください。

特にAPUに入学したばかりの頃は、人前に立って発表したことがほとんどなかったので、人前で失敗するということが怖いと思ってました。今回も怖い気持ちはありましたが、本番の前には友達、家族、親戚などあらゆる人にプレゼンの練習を見てもらい、意見をもらいました。そこでもらった自分では想定していなかった質問は、自分の意見を整理する良い練習になりました。

当日は最初かなり緊張しましたが、段々と落ち着くことができ、質疑応答の時間には審査員の方とＱ＆Ａのキャッチボールが出来たと思いますし、私自身楽しむことができました。時間が終わる頃には、もっと伝えたい、もっと質問をして欲しいという気持ちになっていました。

今後本奨学金に応募を考えている後輩たちへメッセージがあれば教えてください。

時間は有限なので、今やれることをまずやってみたらいいんじゃないかと思います。人は皆異なる分野で才能があるはずなので、自分の「これだ！」というものをぜひ見つけて欲しいなと思います。それを見つけるためには、見つかるまでトライし続けるのが一番だと思います。100回やってだめなら101回目をやってみることです。
「これだ！」と思うことを頑張っている人には、安藤百福名誉賞という大きなチャンスがあるので、「すぐそばにあるよ」「やってみなきゃもったいないよ」と伝えたいです。そしてやるからには賞を取りに行くつもりで全力でやってみてください！きっと良い経験になると思います。

2023秋 受賞者

私の安藤百福名誉博士賞 受賞ストーリー

Shape your world APU Ritsumeikan Asia Pacific University

MY STORY OF ANDO MOMOFUKU HONOR PRIZE /AWARD

安藤百福奨学金に応募した理由は何ですか？

同級生が5セメスターの時に奨励賞を受賞したのを見て、自分も迷ってはいたものの、応募をしなかった事を少し後悔をしたことがきっかけとなりました。
8セメスター生となった今回、APU生のため、そして地域のために国際交流の場を作るという目標を定めて力を注ぎ、活動をしてきた経験から、「自分の好きな事を信じてやりぬこう。怖がらず挑戦しよう。」というメッセージを多くの学生に伝えたいと思いました。
自分の学年は、コロナ禍で予想もしなかった大学生活のスタートでしたが、交換留学も経験し、留学先で見た多様性や共生する人々の姿がAPUにあることを改めて感じました。自分はそんなAPUが大好きで、APUで挑戦した自分の「結（むすぶ）」（国際交流活動）の活動について少しでも多くの人に知って欲しいと思い、応募をしました。

書類申請、面接準備で大変だったことと、得たことがあれば教えてください。

書類申請では、限られた文字数の中で自分の思いをどう伝えるか、どんな言葉で表現するか、という部分に非常に苦労しました。プレゼンテーション用の動画では、「一番力強く伝えられる構成作り」を大切にしました。また、英語でのコミュニケーションや国際交流に力を注いだ自分らしさや、インパクトを出せるように、最初の英語での自己紹介部分を工夫しました。
私は中学、高校時代は野球に取り組んでいましたが、そこで学んだ思考力や日々ノートで考えを整理する方法は、奨学金選考の準備の中でも非常に役に立ったと感じています。

土井　航大

2023年秋 栄誉賞
立命館アジア太平洋大学
アジア太平洋学部
8セメスター

コロナ禍で大学生活をスタートし、人との関わりが制限される中でAPUでの学生同士の交流機会を作るための活動を継続して行い、さらにそれを地域へと広げました。その一貫性のある行動力と、自身で描いた目標に向かって大きく成長してきたことが高く評価されました。
卒業後もこれまでの経験を活かし、多様な交流を実現しより良い社会をつくる活動が期待されます。

Visit APU Student Office scholarship website for more information

公開面接はいかがでしたか？大変だったこと、得たことがあれば教えてください。

面接は緊張しましたが、それ以上に「どんな質問がくるのだろう」とわくわくしました。されるであろう質問を想定しながら、様々な場面設定と方法でQ＆Aの練習をしました。自分で出来得る最大限の準備をしたという自負があったため、自信を持って面接に臨むことができました。
本番では想定しなかった質問もありましたが、書類や面接の準備をする中で、これまでの自分の活動について隅々まで内容、目的、意義を考えたため、答えはその場で出すことが出来ましたし、そのような予想外の展開も楽しむことができました。
公開面接を終えて感じたのは、「やり切った」という達成感、そして自信でした。公開面接の場で自分の想いを伝える事が出来たという自負も大きな自信となりましたし、今後の糧になると思います。

今後本奨学金に応募を考えている後輩たちへメッセージがあれば教えてください。

自分のやりたいことに本気で向き合っている人や、自分で何かを成し遂げたという気持ちがある人にとって、安藤百福奨学金はそれを他の人と共有できる良い機会だと思います。「何かをやった」というのは特別大きい事ではなく、自分の誇れる行動を起こせたことだと思います。
今回の奨学金選考を通して、自分の四年間を沢山振り返りました。それは自己分析にもなり、そして自身の将来について具体性を持って考える良い機会ともなりました。公開面接の場で沢山の人の前で話したこと、そして受賞出来たことで、良い意味での責任感を感じています。これからも他者や後輩のために自分の経験や活動について発信していきたいし、大好きなAPUに貢献したいと思っています。

2023秋 受賞者

私の安藤百福名誉博士賞 受賞ストーリー

Shape your world
APU
Ritsumeikan Asia Pacific University

MY STORY OF ANDO MOMOFUKU HONOR PRIZE /AWARD

安藤百福奨学金に応募した理由は何ですか？

先輩が安藤百福奨学金に応募し、公開面接に出たことでこの奨学金について意識するようになりました。その時の公開面接も実際に見に行き、感銘を受け、自分もその舞台に立つ学生になりたいと思うようになりました。
2セメスターの時にビジネスケースコンペティションに参加し、受賞をしたことで自信がつき、もっと自分にチャレンジしたい、という思いが安藤百福奨学金への応募に繋がりました。受賞をしたいという思いよりも、今自分が成長のどの地点にいるのか客観的に知りたいという思いがありました。

書類申請、面接準備で大変だったことと、得たことがあれば教えてください。

これまでの2年間の中で、様々な活動をしてきたので、何に焦点を当てて話すべきか、自分のストーリーを作り出すのは簡単ではありませんでしたが、これまでのAPUでの生活の中で成し遂げてきたことだけではなく、卒業後の将来への繋がりを考えると答えが見えてきました。
準備を通して、自身の強みと弱点を知ることができました。また、自分が活動してきた事に加えて、自分がまだ出来ていないことも見えてきたことで、これから自分が何をすべきかを考える良い機会となりました。

公開面接はいかがでしたか？大変だったこと、得たことがあれば教えてください。

公開面接のためにとても沢山の準備をして臨みました。また、自分は英語基準で入学しましたが、日英両言語での答えを準備し練習しました。面接の答え方には自分なりに３つの戦略を持って準備をしました。この戦略はこれまで受けた授業、ビジネスケースコンペティション、奨学金面接などで得た知識が役に立ちました。
準備の中で日清食品ホールディングス株式会社の創業者である安藤百福氏についても学びましたが、自分にも彼の経験と共通することがあり、例えばこれまでに臨んだ奨学金選考では残念ながら選ばれなかったこともありましたが、それでもあきらめずに挑戦し続けていることです。3月に受賞者が訪問予定のカップヌードルミュージアムで安藤百福氏についてさらに知ることが出来るのを楽しみにしています。

今後本奨学金に応募を考えている後輩たちへメッセージがあれば教えてください。

5セメスター生というのは、まだ2年間しかAPUで学んだり活動したりしていませんが、自分が好きな事ややりがいを感じる事を見つけ、行動できればぜひ応募してみて欲しいです。挑戦することで失うことは何もないし、ぜひ挑戦を楽しんで欲しいと思います。
まだやりたいことが見つかっていない人には、とにかく色々なことをやってみて探してみるといいと伝えたいです。そして自分が情熱を傾けられることと、力を注げることが重なるものが見つけられれば、それがあなたがフォーカスすべきことだと思います。

ISTESHAM FARHAN

2023年秋 奨励賞
立命館アジア太平洋大学
国際経営学科
５セメスター

これまでに様々なビジネスケースコンペティションに挑戦をし、ジャーナルにも寄稿するなど経験だけでなく学んだことを学業面でアウトプットしている点が高く評価されました。また、コンサルタントとして世界を舞台に活躍するという夢に向かって、明確な学びの目標を持ち計画的に取り組んでおり、将来リーダーとしての活躍が期待されます。

Visit APU Student Office scholarship website for more information

安藤百福名誉博士栄誉賞・奨励賞
https://www.apu.ac.jp/studentsupport/scholarship_tuition/ando_momofuku/

KARINA Viella Darminto

2023春　栄誉賞受賞

アジア太平洋学部　インドネシア出身

安藤百福奨学金に応募した理由は何ですか？

私は5セメスターの時にも応募し、そしてその時は受賞出来ませんでした。そこからこれまでの間に、留学や大学のプロジェクトBでの活動を実現させたことなど沢山の変化や行動の実現がありました。それで今回、「８セメスターになった私」でもう一度挑戦したいと思いました。
5セメスターで受賞出来なかった時は落ち込みましたが、その後留学の経験も経て、自分にとっての「成功」の定義を改めて考えるようになりました。受賞だけが成功ではなく、自分が何を成し遂げたかも大切と考えるようになりました。
この奨学金が特別なのは、公開性にあると思います。自分が応募したことや面接選考に進んだことは学内で広報されますし、面接も公開面接です。その中で、多くの友人から応援の言葉をもらいました。公開であることで自分に良いプレッシャーが掛かったと思います。

書類申請、面接準備で大変だったことと、挑戦から得たことがあれば教えてください。

今までの活動を自分の言葉に落とし込んで、18分の質疑応答という限られた時間の中で自分の活動をどうやって伝えるか準備をすることに力を注ぎました。質問をするのは自分の事を長く知ってくれているサポーターではなく、その場で初めて出会う審査員です。限られた中で伝えることは本当に難しいことでした。私は5セメスターで受賞を逃がして以来、自分の活動を振り返るためにジャーナルをつけるようになりました。それは定期的に自分の活動を振り返る良い機会となっていますし、選考の準備の中でもとても役に立ちました。

Shape your world
APU
Ritsumeikan
Asia Pacific University

公開面接はいかがでしたか？

公開面接ということで緊張する部分はありましたが、ベストを尽くせばいいと考えていて、面接会場に来てからは落ち着いていました。それは自分が十分に準備をしてきて、自分の活動にも自信があるからだったと思います。
公開面接なので、他の学生にも注目されているということを感じていました。不安もありましたが、リーダーとは良い時も悪い時も周りから見られる存在であると思い、自分のリーダーシップを試される場面であると思っていました。
審査員からは予想していなかった質問も出ましたが、これまで自分が学んだ知識の中から落ち着いて答えることができました。5セメスター生の時ではそうはいかなかったと思います。

今回の奨学金選考の経験が今後のあなたにとってどのように役に立つと思いますか？

自分がプレッシャーの中でどれだけやれるのか、ということを知ることができました。今回の受賞は、今後自分が自信を失った時に、「あの受賞があるじゃないか」と拠り所にできると思っています。応募した時には自信があった訳ではありませんが、十分に準備をしたことが自信に繋がりました。今後困難な場面に出くわしたとしても、今回の経験を活かして対応することができると思います。

今後本奨学金に応募を考えている後輩たちへメッセージがあれば教えてください。

アドバイスができるとしたら2つあります。
1つは自分を客観的に見れるようになることです。安藤百福奨学金は学内の名誉ある賞で、たった一人しか受賞することができません。つまり、100人学生がいたら99人の学生がやっていないことをする必要があります。ミニマムに活動するのではなく、自分の中のベストまで活動をすることが大切だと思います。
2つ目は、カップヌードルミュージアムを訪問することです。書籍を読むだけでは分からない、安藤百福氏の人となりや考えを学ぶことができます。私も横浜に行く機会があった時に訪問し、そこで沢山の事を学びました。

Shape your world
APU
Ritsumeikan
Asia Pacific University

PUTRI NAILA DIRA

2023春　奨励賞受賞

アジア太平洋学部　インドネシア出身

安藤百福奨学金に応募した理由は何ですか？

友達に「あなたは応募した方がいいよ！」と背中を押されて、怖い気持ちもあったけれども応募してみることにしました。自分がこれまで何を成し遂げてきたのか知りたい、そして自分に挑戦してみようという気持ちで応募をしました。

書類申請、面接準備で大変だったことと、挑戦から得たことがあれば教えてください。

申請のためにこれまでの自分の活動を振り返り、自分の活動のストーリーを作ることにはとても時間が掛かりました。自分が何が好きで、どうして活動に対してモチベーションがあるのか、自分のことは自分で良く分かっています。しかし、それを自分のことを知らない人に言葉で説明するというのは初めてのことで、とても難しいことでした。クラスでも、学んだことを発表したことはあるけれど、自分の事を語るというのは初めての経験でした。自分のことを振り返る中で、活動を始めた時に持っていたモチベーションをもう一度取り戻したように感じます。自分は何故この活動をしているのか、self reflectionの良い機会となった。

公開面接はいかがでしたか？

とても緊張しました。もし落ち着いて見えていたとしたら、自分を良く知るために沢山準備をしたからだと思います。審査員からの質問は「評価される」というよりも「自分を見つめ直す」機会となったと感じます。実際に、質問の中にはそれまで考えていなかったアイディアがあったので、自分にとって新しい発見がありました。

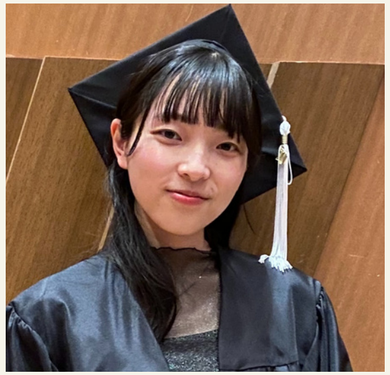
今回の奨学金選考の経験が今後のあなたにとってどのように役に立つと思いますか？

選考過程には公開性があるので、この選考を機に自分のことを知ってくれた人が増えました。これからもっと大きなネットワークを築いていく良い機会となると思し、自分の活動のサポーターが増えたら嬉しいと思っています。この奨学金選考の経験を周りにもシェアしていきたいです。そして、受賞したことでこれからも活動を続けていく責任感を持つようになりました。

今後本奨学金に応募を考えている後輩たちへメッセージがあれば教えてください。

他の申請者や、過去の受賞者と自分を比べる必要はないと思います。この奨学金選考で大切なことは、自分のストーリーを伝えることです。この奨学金に応募することで、自分のことをもっと知ることが出来るし、自分にチャレンジすることができます。決して他人との競争ではないと思います。

中山 美帆



2023春　奨励賞受賞

アジア太平洋学部　日本出身

安藤百福奨学金に応募した理由は何ですか？

国際生の先輩から薦められたことがきっかけです。安藤百福賞の事は知っていたけれど、雲の上の存在だと思っていました。でも、身近な人から「応募してみたら」と言われて、自分でもできるんじゃないかと思いました。

書類申請、面接準備で大変だったことと、挑戦から得たことがあれば教えてください。

私は入学してからこれまで、「とにかく行動あるのみ」と全力で活動し、突っ走ってきました。今回、書類審査のためにエッセイを書いたり、2次審査の動画を作成したりする中で、自分のこれまでの活動について一度立ち止まり、振り返るいい機会になりました。伝えたいことが膨大にある中で、字数制限のあるエッセイにまとめたり、動画にまとめたことで、これまで自分を支えてくれた人たちへの感謝の気持ちを改めて持ちました。そして自分の活動のコアになるものは何か、今後成し遂げたいことは何かを考えるようになりました。

公開面接はいかがでしたか？

審査員からの質疑応答はとても緊張しました。思ってもいない質問をされ、上手く答えられない所もありました。しかし、面接の日だけで終わりだった訳ではなく、数日掛かったけれどもその質問を受け止め、考えました。そして、自分は「好き」という気持ちのためだけに活動するのでなく、今後何を成し遂げたいか、私のサークルである「pospos」の目標を考えるようになった。面接審査では、ショックを受けてから這い上がる力、耐性、批判的な問いかけの受け取り方を学びました。

今回の奨学金選考の経験が今後のあなたにとってどのように役に立つと思いますか？

私はこれまで行動あるのみだったが、今回の選考で「行動」することと「考える・振り返る」ことを行き来することの大切さを学びました。これからは、「今・この瞬間」だけを見るのではなく、これからなりたい自分像とこれから挑戦したいことを考えながら行動をしていくつもりです。

今後本奨学金に応募を考えている後輩たちへメッセージがあれば教えてください。

これまでは、「評価される」ということにあまり良い印象を持っていませんでした。自分がやっていることは、自分が良ければいいと思っていたのかもしれません。しかし、今回の選考を経て「評価されることの意味」」を肯定的に捉えられるようになりました。自分の活動や意見を客観的に評価されるとことはいい経験でした。ぜひみんなにもチャレンジをして欲しいと思います。
応募した時には不安、怖いという気持ちがありましたが、思い切って挑戦して良かったと思っています。